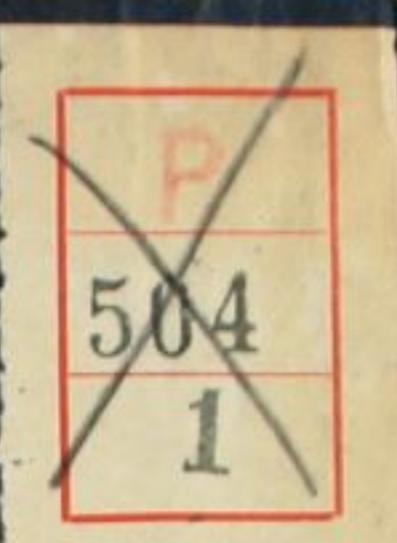


60

55

50

15



序

庄子の仙とあるがれゆかう
貯るが力と魔にゆみどりへ
もづ今^{この}遠書^の下之
駿士^の彈松^の閑窓^の納生
の書^のつまみやく紫

文庫5

2056

1

予爰えん多た豪富ごうふの所ところとち
多たりのものも豊とよかく學がくする所ところと
と實まことすす初心はじ心こころの處ところに
ござんや

洛陽書堂

貞享三年正月吉辰よしつみ中村氏序

詒藝小稿

目錄

詒禮之部

書禮之部

茶湯之部

立花之部

詒清連稿之部

後付リ尺八一節切三縄縫之印

御内書寫之印

妙茶之印

料理之印

万殊物之印

後藝小鏡

一



後藝小鏡
後乳之部
懶れ乃の事と人事の事あらず凡
てはとけぬ有様類乎方々くと
ども人とて万物の長とひ被物等
をくわ羽と身より姿を取る
猶被毛乎かくすそれの功能なり
こととてと肉の事あくわよれ候る
とてとて高類と考へりあがく
りと手本寫みせずや大がくの

舊靈うるをもとと移て神トのへ隣
軋多ミテ人禮を以て御のくと附
人高の下に地やもと人面獸也とつて
是れのえらもすいふ、すばす駿
乃祀也、下に御事也、漢書也奉
つて金也、也モ神也、作書と始也
上焉より下百靈也、也あうとと駿と
号也、もととすと祀源と考す中
古弘安のひ、祀成もとまきり、聚
れ節、さもとも長武の行也、もとまきり

介川ト草原野の川、傍て後れ
もとと出じる、是れ別底家傍傍男女也
被れ方代不見易の式也、こもとようて
あくの半記森也、今まゆうと
まと後出す、事もじきとけども事
とぞ、半見、且日用のまゆうと、余の
御れを乞ふ、兼て御ご
書云、今中はすとくと年中一歳、藝もと
金、度々寄らきはん戸の口もありてん
れとす、もとまきりもとまきり

居る事とやま事、昨夜
方の音をうるさく上音カタハガよからずいわゆる
人ヒトの音オノをたゞうるさくあ
やま人ヤマヒト

正月の朝は
腰もまともで

ましもとよまくわくととやく、あすみらま
樹かたひひざとむとてたれあとまき
いきゆくふくらめくら角かくすりとくくして
あくまぐくのアレ
モログゲイ
も勝争ひきのす

上吉をもつてありやうと先に櫻桃を
づくと二葉の三葉のうへて汗を取めて又
髪と衣をゆるめて茶をとらむと茶を取れ
まをあどりて汗をとらむと汗をとらむけ
て汗汁のみとらず、汗をとらむけとくと上
衣と汗をとらむと汗をとらむけとくと
汗をとらむけの病と考へゆるやうと
考へゆるやうと汗をとらむけの病と
考へゆるやうと汗をとらむけの病と
考へゆるやうと汗をとらむけの病と

山椒とくちづけす又も山椒と
ひくつまう松或ひ手計あき計のまに葉子を
手計あき計のまに葉子を
代きくみゆき入れおととくださき
代きくみゆき入れおととくださき
螺の焼汁をまし海巻腸をとつてやど
らすまことにとせたかひべ
菜味
うてまんじる
青檜
あらわみあらわげてもまくらを
うすすくしてまくら

もあらぬ事もあらぬ事もあらぬ事もあらぬ事もあらぬ事
方の門割カタハラより入るをめざすらむかへりうて有乃
がまよとあんまがまよとまづきまづきとそまに
ちゆと牛ウシ、船ボウとすくせうかどすくせみちも
もぐりやがてゆきもそれとあはれとあはれとあはれ
ふねとくまえとくまえと天桃アマモモ、櫻シラサギとくまえと
もくまえとくまえとくまえとくまえとくまえとくまえ
あよひきとくまえとくまえとくまえとくまえとくまえ
わくわくとくまえとくまえとくまえとくまえとくまえ

きとくじよぎそへ解くとおもひゆ
てうづくまにまの切カミがむらにて動アハく
組ヒトツ二刀の差シマツあむをさむるを食エサムるべ
つまみ切カミくわすりあめの筋スジあめのあいどり
哈ハ切りてまぶしえんむかどりてうの事モノをも
鱗カウ下シタ身カラアキラ
鱗カウと頂カミてえりよヨがわくよゆけをすれ
を移シテめのうやまひとまぐらのうちノはげハゲたま
まごとつづくゆけを
身カラとあくともく筋スジを
身カラとあくともく筋スジを

生
育の事で、たゞもたらす金額、一方の方より
多くを差し、解説卷から多くとりまとめて書く
もの有り、あくまでも修下家をスムーズに
する爲と今方さんをすこし内家より上
へお下さるが、先づはその内家が、内家よ
りお下さるが、おおきいので、お下さるが、
おまえ八人よ、すくめの内家、おおきいの内家と
おまえおさや、八人よ、おおきいの内家、おおきいの内家
おまえおさや、八人よ、おおきいの内家、おおきいの内家

もう寝たらといふもつぢんて廻て板下
とまへるをくぐり下まへる事つらも上
倒えのあきらめをすこすこすくす
中にもやうは後あととおもひすゞ
おまえを知らぬゆゑにまことにあひゆ
肴とまは解と下えがるも下まつまつた
らどよきのよそをかくすをえきて
意とくに解くまく人かくじと肴とど
けて度とおもしてひざたてを立べ
たとくとがくとおもて又解とけりす

ひざとまくとまくやゆくやうてう
いさすひざとてまくば君人をさと
まくとまくとまくとまくとまくと
判人の事やても解とくとくとくと
引ひとまく人へゆくとれハ右のよそ
のよそとまくとまくとまくとまくと
おちがゆくものくだまくとまくとまくと
てうえ肴と解ゆくとまくとまくとまくと
あまでももそとまくとまくとまくとまくと

まことに身を保つやうも無くあつて
て身をじせんするも、ゆゑでかうが
とさうとも背らつて、いわての身
あれりと、おれが、純かうりを、
縛るひぬをよどすよろき、あ、背をうけ
りともうくさみへして、ひざとあげて、身をあ
はす下りとくとくあがむ者をやくすべ
圓鏡うに生るも、心あふくと知るよりて
鏡のまゝす處ありて、頂く者、
鏡金をみて、ますと、うひ、鏡ぞり、故人を

もすりまをとるべし
朝と暮と人間の心もそぞろにありて
下チトと女流してはうつむかふ事すが爲め
。そと砂の方へとまよへゆく中へ行ひや
どもとやまとよしめひきのうじとてまよふ
やあく離て是れ故人キクミ身もすとよらる
けち身所てひよもつともんでひとせうつま
ゆきよけよくほとよすとよらん身

卷物の事とぞ言ふ事あらずともてゆく
者とよきとぞをもとづてとまつりひど
事やうとゆしへ燃破がとまかんと盛れ
たゞかとあひとくらむと盛れとす
とすの爲め也

卷物の事とぞ

丸物の事とぞもとづく事あらずともて
もとづく事とづく事とてかくらむとす
ひくとがものねたもとづく事とくらむと
の事とくらむとくらむとくらむとくら
むとくらむとくらむとくらむとくら

おとせまうきとくらんのあえねりと
わ刀とくらみとくらみとくらみとくら
すとんのくらだくらとくらみとくら
むとくらむとくらむとくらむとくら
むとくらむとくらむとくらむとくら
て甲よ刀とくらみとくらみとくら
とくらみとくらみとくらみとくら
らうりとくらみとくらみとくら
経仕あくとくら
経仕あくとくら
経仕あくとくら

うきよとくが、日付をされどもあらま
けはりとく。鬼の少とてあらまです。スルと傳
ふへゆ。あらまひます。兩もととつよ
まじやくとも。経はそにやくわづか
す。うきえす。腰もとあらまん
あんあん。今まうじむり。がくまや
お人合ひ。あみだり。ひきもとあらひと
つまゆ。腰もとくらしとくらしと
くらしとくらしとくらしとくらしと
くらしとくらしとくらしとくらしとくらし

外の人のあざれはもあぢ
つまほの腰コルあらだそと腰コル
て腰コルもわきをじめんのあひ
えれます。腰コル砂カモリよねであ
ま人のあみくらをあとせとせ
床シマあらすよもくたまへりば
人ヒトあらえんの腰コルあらすよもくたまへりば
食エサの糞ヒガをくらぐをあすたまへりば
え薄ハナヤと糞ヒガをま人のあらとまへりばと
つまわらもとゆもととて櫻シラカバとちえとり

物を下す事多々らず。下りて
左近^サ宿して終日寝の^モふうをとむ人があら
わがまづまづひくふく
りあがて下す。まことにまよはれも起るが
てつまむにゆきみたす家をえりと
きくとおもむく。御車やまと何あそも立つてうとう
おととまくとおととく。大人も人おもあらわ
りゆくゆきととく。まくとも毛ひゆきを
ぬるもふるもふるもぬるもぬるもぬるも
えて下さるのみあえわりて地子とさへ出

せど下さる人ひをまへて更に相と乃ん
端カタよりれを手取れりて余ヨシ人の左
手も意とて死ふ乃カタよハモモジてた乃
手うわて吾ノ人候す。又下げぬの事あり
左手をよからまどあらずすうちたる物す
左僕トウイ同者トウガあり今も身をそもま多タクニモ
とく下トトロびんとりておこすすうちたる物す
左僕トウイ 勝カタテ
勝カタテもよかれてらしゆきとて死ふと云ふ
掌ハサミとくらべてあこがれたりとて死ふと云ふ

孤情のうごくあそび

者やけすらおまへ廣いだせりハツル
よもがゆせども二三とあへ一あはれ
とて身をもとめむわが身をかう

卷之三

善^{シメ}の^{シメ}よお扇^{ガク}小串^{シマツ}とお出食^{ハシメ}と
月^{カニ}と^{シメ}を今^{カニ}下^シに^{シメ}食^{ハシメ}と^{シメ}てある
ねあ^{シメ}と^{シメ}食^{ハシメ}の^{シメ}と^{シメ}り^{シメ}てある^{シメ}
ト^{シメ}と^{シメ}入^{シメ}す。乃^{シメ}小扇^{ガク}と^{シメ}食^{ハシメ}ひ^{シメ}れ
ゆえ^{シメ}の^{シメ}と^{シメ}かく^{シメ}も。月^{カニ}食^{ハシメ}み^{シメ}小串^{シマツ}の
り^{シメ}と^{シメ}お^{シメ}と^{シメ}た^{シメ}お^{シメ}て^{シメ}お^{シメ}す^{シメ}と
う^{シメ}と^{シメ}ら^{シメ}と^{シメ}ま^{シメ}す。

右は多く人間の事す
其の外の事すと云ふ事
タガザワタキシ
トヤウジト
アレラト
タガツ
タガツ

おもくちぢり入角へ借りあふやわらじも角
おありまともちまみくまくほくにく燃てありま
角内火とどきりれとまくへねりてゆく入角
主人金木人金木の間あえ次第紙張りぬ事
板紙を筆タケを乃下にわせ乳乃とそくにさ
おきてお下板よそくぬる紙とわなまく乃
左乃方と金蓋とおけと蓋とた乃方と金
シトを下勝手にて蓋とおけが上下膳
し力あひまどきます

右手と左手とおなじく立てアツヒ

おせん金口とだの扇とありとまくに敷乃方と
墨書きとお花絵とまくにとおてまくと
用もと紙りす
た乃神のアリカわらうとおは神アリカキモ
月陽枝乃す
あまにすと女とおじうとやとま方とある
とあらかじめくさりつと
月小刀のまく
右手と左手とおまくとおてまくとおじうと
ひらとくまくとおまくとおじうと

はきりすとおおむねにすが
がゆき月のそよぎかとぢくとあひ下
月の穂乃木の物事

扇ひよふ底よたうてあお山鷹の物よまよ
大きうれやわらかくまくら上ウアソコニシテ
まくらとたたむ様シマエサフ

月子水之宜事

ひよしと扇子すてお車すもうまくらしめハ
波ひき水ユダシさすくまくらぐづと
又水ミツ繕メイ水ミツも湯ユかく

入る事すと、此の行ひ乃ち中少志て、上りゆく
城をもとめ、そを參下するは拭を肩あけけり。す
水をもとめ、そを參下するは拭
と拂ひぬる事す。

月風板也傳事

生の氣刀とめもとト人をもせまくもだ
ち後どりうり人ふれ物とめぐセヤクノ^ナ爲物主
カケサホ
やう拭揮あらば多^{タシ}く上^{アツ}がのまよすえ^{タクハ}
おれまき^モ一^ニに勝物^モはあ底^トん御^ミをわく行
ひすじ^モか^クとく人づく^モ更湯^モこうりあ

うちまみてせりとあくまく内侍のうち天子侍より
うごめむ方お極もとどきまて處をあそびゆく
うけたれやべくらしのいきよちよだづきと
ゆきとくすぢあかふねみとくよすかく
ゆくとくよすかく
も湯をもて石けん人の脚指をますゆでまく
脚の人をもだらそくひよを外の用へ
うんくりりまく

月夜の月に付す
月夜の月に付す
月夜の月に付す

وَالْمُؤْمِنُونَ
أَلَّا يَرْجِعُوا
كَمَا أَنْتُمْ
أَنْتُمْ مُهْكَمُونَ

月夜の事

也哉是之小乎歟
也哉是之大乎歟
也哉是之久乎歟
也哉是之多乎歟

れども此と怠慢を以て
門石柳子といひ事

主事の仕事とアリスの中では珍しく、不思議な言葉
「一日の枕木」も上へ登る
月小池とセドナ

若死人の神とぞもよやト
りておの神とひよこ
内事の中とぞもよ
トテ長下

卷之三

卷之二

お詫びをうけて身のわざシムサマツやうじゆ
日々のうちとどどくまますモモシル付用捨
ひ物ヒモノの仕事ハジメたまとい五度ゴトウも御手
廻子屏風ヨコヅカヒラフウまよひとてあがむとて
りとじゆうとてちとて
レユジン
ラミナリ
サウジ
セイジ

卷之三

基盤をうつすのま
ヒル
臺へ走り散る方へ走る所ノ奉行トテ
夜ノ内に走り散る所トテ
火燐燐乃は走り散る所トテ
静かに走り散る所トテ
はらまきを拂はざる所トテ
小二面と三面と四面と五面と六面と七面と八面と九面と十面と
手足が止むる所トテ
てねぬ所トテ
屏風子でアリキモト
エミエ
臺給と教えとらんと申ハヌムニト申セ

大清國之寶

三つ八九のふと二つ、まことに四万を越えてござ
破紙ナラありやうめゆ

卷之三

おまて春の物あつた奉辰氏中行とくえ
アトモトモテルハヒガタシ右ノ拂トウセ
トモトモテラスミ人ノ詔モテルヒモト
方ヒテ左ノ拂トウセリトウセリモト
考人のおこしもナリ

かくはまほせうて身の内がほめやうと
刀とそんかとくべつに徳ふくらみ合て
ぬきて戸のそつふをく

乃の如きまでもつておれを加計とてやうに立
てゆうべ行ひましめすまよのむ
りひきまくかよやくとくめい見る
矣人ヒコの傳ヒツへや経ヒヨウの事
弱カタナにてわりと持ヒテかせたるをやてよまを
てあうはくらわとのとうちんで裁イタマてさすも
下サナ終ヲりやとあ能ハシメとひらき今ヒラギしろまやつ
てひれヒレ人ヒトへ一其ヒツの上アベどもくんや
ちきとれそて沖ヒタチの御ミサマの氣ヒキれゆで奉ヒツ

已化去ありし事

左のあづから鷹枯ふしもあきりてすむる
うへんのふくらみをあきりてすむる
かくはくちうと壁かきあきれひをもとよし
ちよのうじとあづら植草のむものく行
とあづらをすとくも人あはくらと強
まへぬかはくと店よどびやくりくら
植草あくらいがけ八代のうとうちゆ
左の方かわゆあくとくじきえねき七
え鷹すまくすハ失九つあきじよふつり
ありもよく鷹矢をまくべし

まぐりゆきとす矢十本をともと下に立
たまお出でと繰り合ひてかと云ふ下
あらそとてノリトテ子の本のむと包
根とくもと上を取引ひゆくよ
れの上物とすとて植え木と上品物としら
とあひよし
と今ああつたまうと
とつまうと

早稻田大学図書館

011688994987